

うに言われた。でも、理由はたいしてないようだった。叔母がその学校の教員だったが、それが理由ではないらしい。単純によろしくないということだ。で、ぼくは言われたとおりにした」それでもキングはうれしかった。購入者たちが、その発禁本を返却したくないと言ったからだ。そのようにキングはダグラス・E・ウィンターに語っている[註10]。

12歳のとき、キングはSFとホラーの40年代半ばのペーパーバックがどっさり入ったダンボール箱を、エセリン伯母さんの家の屋根裏で見つけた。H・P・ラヴクラフトの作品も入っていたが、それらの本は、キングの父親が残していったものだった。かれもまた、ホラー小説の創作に手を染めていたのである。1作も活字にはならず、ドナルド・キングはもっぱら不採用通知を受け取っていた。キングはそのことを『死の舞踏』で明かしている。箱詰めになっていたペーパーバックがキングのホラーとの最初の出会いではなかったが、それが本格的なホラー小説との邂逅であった。1週間後、その宝の山はすっかり消えていた。おそらく、エセリン伯母の計らいだったのであろうが、真正ホラーとの出会いはキングに強い影響を与えた。

13歳までには、キングは出版社に投稿するほどの自信をつけた。1ページの超短編「殺人者」をフォレスト・「フォーリー」・J・アッカーマンの雑誌〈スペースマン〉に送っている。そのときは活字にならなかった。アッカーマンは、伝説的な収集魔として知られているが、キングの若書き原稿を保管していた。数十年後、アッカーマンはその原稿にサインをもらえないかとキングに依頼している——キングは即座にそれが自分の投稿原稿だとわかった。当時、欠陥タイプライターで執筆していたためにNの字がすべて手書きになっていたからだ。

1963年にキングは、それまでで最長の作品を完成させている。5万語の長編『余波』で、後年の作品の特徴をいくらか備えている。ポスト・アポカリプスの世界が舞台で、軍事組織（『ファイアスターター』で初めて登場する〈店〉に似ている）が新世界の秩序を築こうとするが、

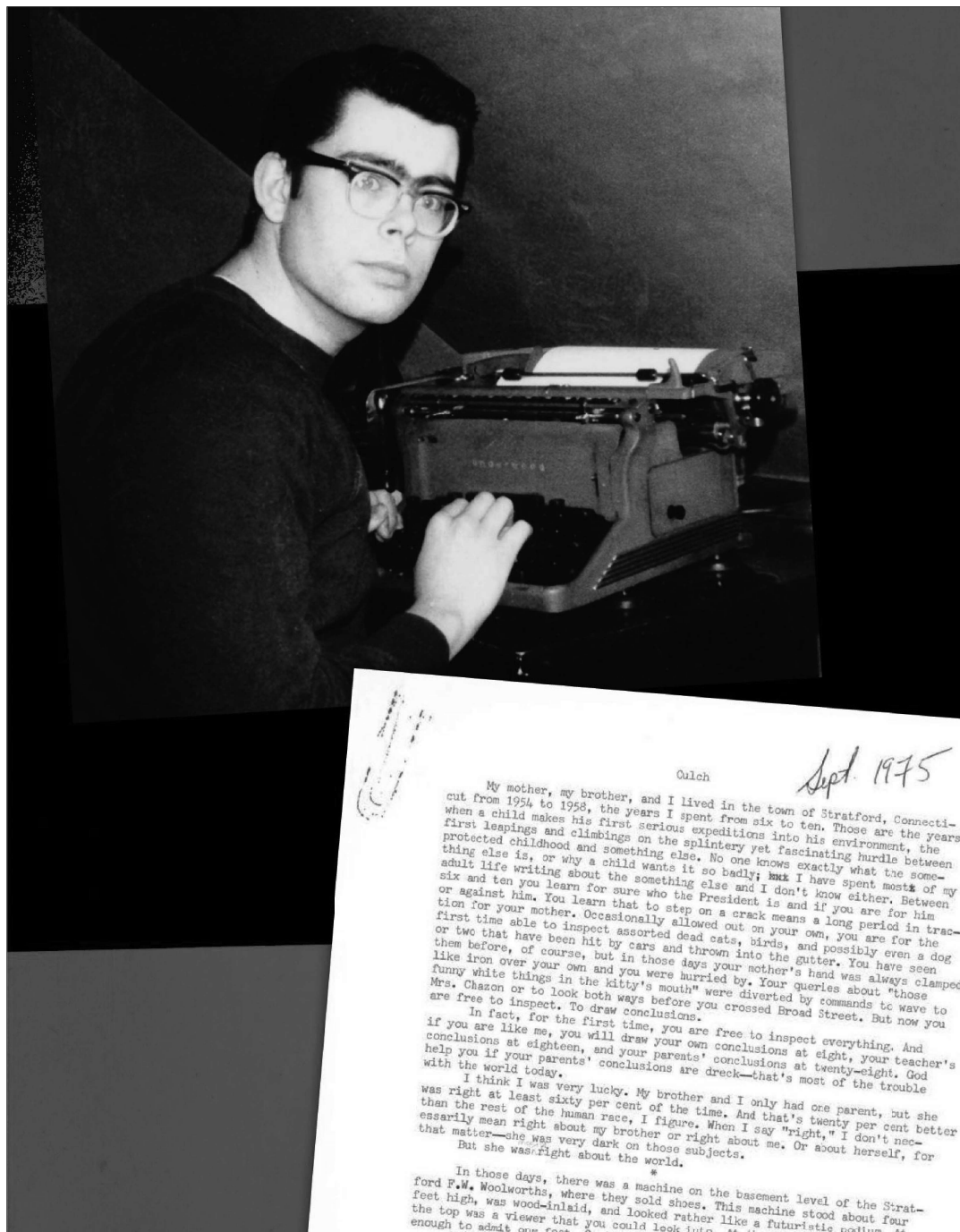
そのさい助力を得るのが最新のスーパーコンピュータで、その名もDRAC——頭文字だが、どうしたってブラム・ストーカーの吸血鬼を連想せずにはいられない。『余波』は児童にも等しいもので、今後も陽の目を見ることはいだらうが、キングの長編を書き上げる意志の強さと才能がうかがえる1作だ。

1964年6月、キングは4000語の短編「スター・インベーターズ」を騰写版で印刷している。その18ページの小冊子の版權表示は、〈トライアド社&ガスライト・ボックス〉と記されている。そして献辞として、「ジョニーへ、この種の話を読みたがったので」とある。どうやらキングは、特に友だちを喜ばせるつもりで創作していたらしい。中編「スタンド・バイ・ミー」のゴードン・ラチャンスのように。

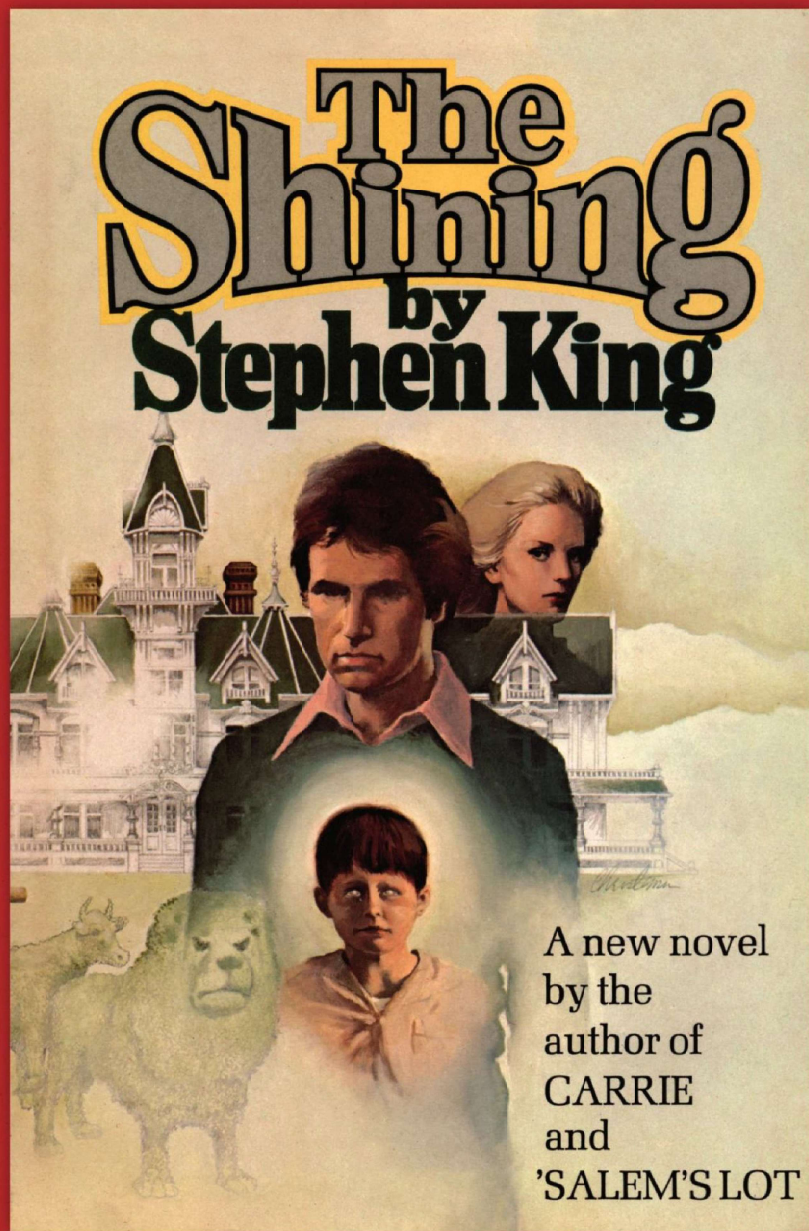
さらに2点の短編「コードネーム：マウストラップ」と「43番目の夢」は、それぞれ1965年と66年に、キング自身が編集に携わっていたリスボン高校の校内新聞〈ドラマ〉紙に発表された。だが、キングはこう語っている。「〈ドラマ〉紙は、ぼくが編集者として采配をふるうと評判がよくなかった。今も当時も、ぼくには役立たずの時期と有能な時期があるんだ」[註11]。さきほど述べたふたつの短編が掲載された号が、近年発見されたが、いまのところどこにも再録されていない。

キングはふたたび学校当局に睨まれた。〈ドラマ〉紙のパロディ・コラム欄「村民の嘔吐」で文才を発揮して、教員たちに関する面白おかしい話をでっちあげたのだ。今回は、居残りの罰を受け——気分を害した教員たちに謝罪させられた。そして生活指導教員は、〈リスボン・エンタープライズ〉紙のスポーツ記事を執筆するようキングに強要した。キングの文才と執筆活動に対する熱意を認めつつも、教員たちはかれの創作エネルギーの流れをなんとか変える方法を模索したのである。

キングは、〈アルフレッド・ヒッチコックス・ミステリー・マガジン〉をはじめとしてさまざまな雑誌から教えきれないほどの不採用通知を受け取っている（それらを枕



右ページ:タイプライターに向かう若き作家。1960年代後半。



A new novel
by the
author of
CARRIE
and
'SALEM'S LOT

Tony Zavarelli
Director
Wholesale Sales

SEPTEMBER, 1977

DEAR NAL WHOLESALER:

"THE SHINING"

- OVER 200,000 HARDCOVER SALES
- LITERARY GUILD FULL SELECTION
- NEW YORK TIMES BESTSELLER
- BESTSELLER ON NATIONAL AND LOCAL LISTS
- EXCELLENT REVIEWS IN COSMOPOLITAN, CHICAGO TRIBUNE, BOOK WORLD, LOS ANGELES MAGAZINE, CHICAGO TRIBUNE, NEW YORK TIMES
- MAJOR STANLEY KUBRICK MOVIE STARRING JACK NICHOLSON IN LATE 1978

STEPHEN KING

- MASTER OF THE MODERN HORROR STORY
- AUTHOR OF "CARRIE"
 - Pre-movie tie-in, 1,476,000 copies sold
 - Movie tie-in, 1,524,000 copies
 - Total of 2,900,000 copies sold
- AUTHOR OF "'SALEM'S LOT"
 - 2,200,000 copies sold
- OVER 5,100,000 SIGNET STEPHEN KING

N A I

- BIGGEST RADIO AD CAMPAIGN IN NAL'S
- A HUGE \$100,000 WILL BE SPENT FOR
- EXCITING RADIO AD WILL BE MADE AV
- TRADE-OFF ARRANGEMENTS WITH LOCAL
- SUBWAY ADS IN MAJOR MARKETS
- EXTENSIVE TRADE ANNOUNCEMENTS IN
- LOTS OF POINT-OF-SALE STUFF
 - Exciting floor displays with
 - Easy-to-place counter displ
 - Striking silver lip cards
 - "THE SHINING" T-shirts for
 - National WATS line for ret
 - Super contest for your pro

"THE SHINING" . . . SIGNET'S HUGI

TZ/lm

AM

New America



1st draft ms.

THE SHINING
By Stephen King

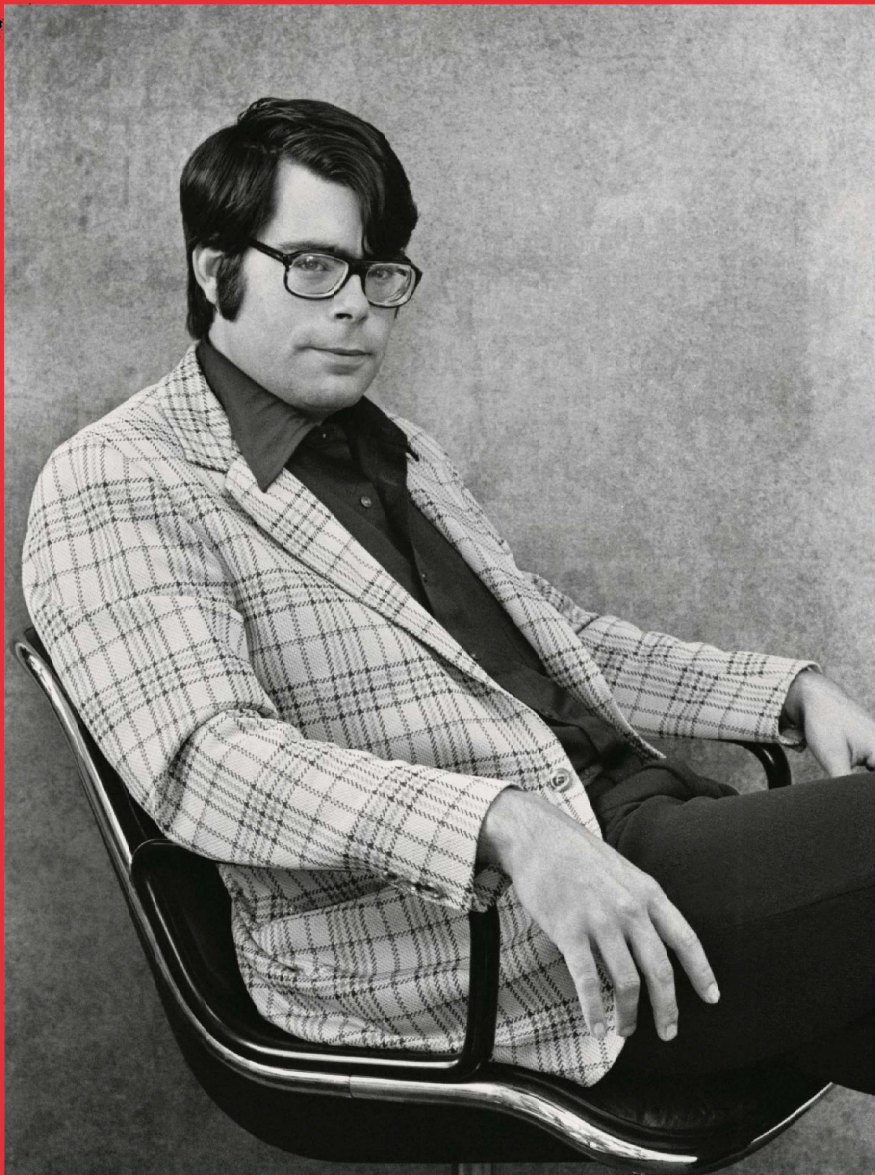
May 13, 1978

Bill,

Here is the book—
needless to say, I hope you
enjoy the reading of it—again
I would really rather you didn't
show it to anyone until we've had
a chance to talk about it—also,
this is the only copy, so don't lose
it!

All the best
Steve

左ページ:ダブルデイ社のハードカバー版『シャイニング』。上:ペーパーバック版『シャイニング』発売のため、NAL社の出版取次業者に送ったプロモーションレター。下:長編3作目『シャイニング』の初稿。オリジナルタイトル『シャイン』にキングから編集者への日付入りメモが添えられている。



は？」[注49]。

ジャック・トランスは脆弱な性格のためにホテルの邪悪なものに屈する。オーバールック・ホテルの悪霊の影響がなかったとしても、かれが雪に閉ざされた環境で家族とともに生存できたかどうかはあやしい。一家がホテルにやってくるのは以前から、ジャックは一触即発な危険な男のキャラ・イメージ——経済的ないしは感情的なブッシュャーのせいだ家族を殺したのちに自殺して新聞の見出しになるような男だ。背中を一押しされるだけで、いまも暴走しかねない状態にある。キングは序文でこう述べている。「このような物語（ホラー）が存在するのは、実人生における恐怖に対処するために非現実的な怪物や妖怪を創造する必要があるからだ」[注50]。

ついでキングは、こう述べる。「だが、怪物を恐れることはない——こわいのは人間だ」[注51]。これがキングの作家としての成功の秘訣である——かれの作品は基本的に、ストレスの強い状況下で人はどのように対応するかについて語っている。かれは共感できるキャラクターを創造したあと、かれらを壊滅的な状況に陥らせる。

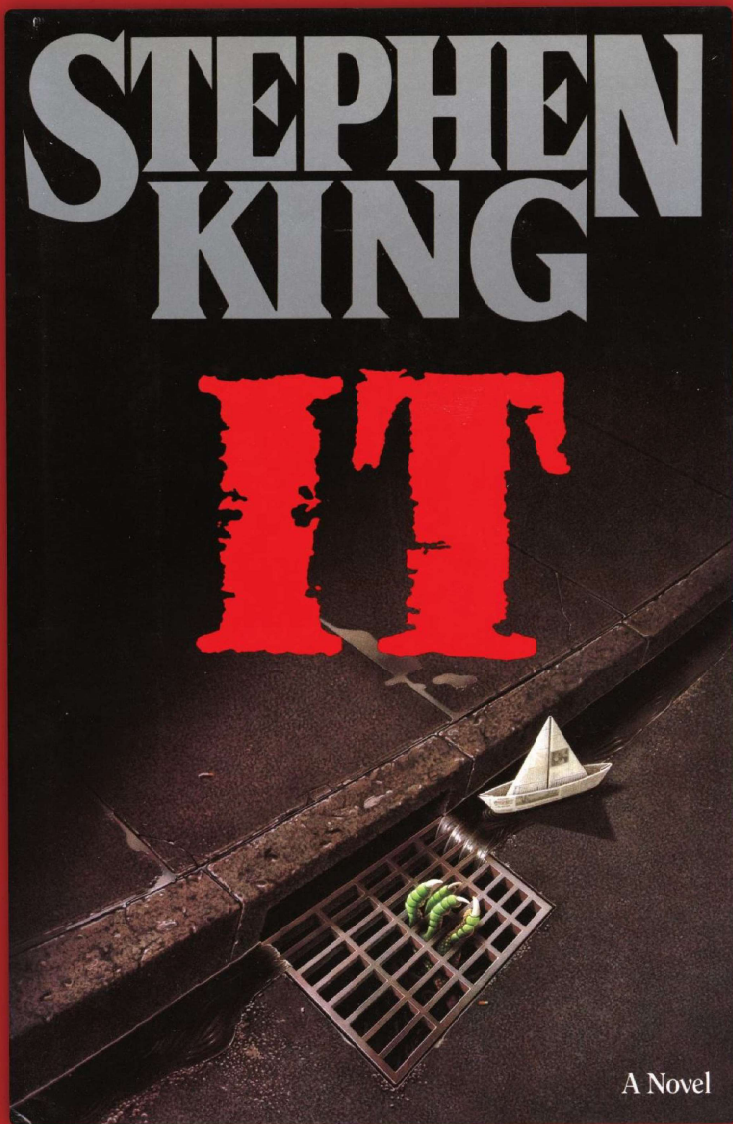
ジャックは戯作の創作を中止して、オーバールック・ホテルの歴史を執筆しようとする。地下室で発見したホテルに関する記録文書に取り憑かれてしまったせいだが、それはかれ自身の過去から逃れられないことの比喩である。キングの想定するジャックは、基本的には善良だが、暴力の恐ろしい魅力に屈してしまふ人間だ[注52]。その人柄がジャックを「より現実的な（そしてたぶんより恐ろしい）キャラクターにしている」[注53]。というも、かれは単純でわかりやすい人間ではない。犯罪を行うにしても、それは超自然的な力のせいだけではない。ジャックは虐待の悪循環にからめとられている。母親を殴る父親に対して憎しみを抱いていたが、いざ自分が父親になると、今度は息子を虐待することで倒錯的にも暴力の呪いを息子に継承させようとする。「ジャック・トランス自身が幽霊屋敷なのだ」。キングは語っている。「かれは父親に取り憑かれている」[注54]。

それは別に驚くほどのことではない。キングは父親像に対して両義的な感情を抱いている。なにしろ、かれが2歳の時に父親は家族を捨てて失踪したのだから。のちにキングはインタビューで慎重に言葉を選んで語っている。「ぼく個人の父性観であって、他の人のそれとは異なる——つまり、子供のときに父親がそばにいて、釣りに連れて行ってもらったりキャッチボールをしてもらったりといったことを、ぼくはまったく体験していない」[注55]。ホテルは、ジャックを主たるターゲットにしているように思えるが、実際の狙いは息子のダニーである。優れた超能力を持っているからだ。ダニーの母親ウェンディは、芯が強く自立した女性である（キューブリック監督の映画版『シャイニング』で描かれたキャラ・イメージとは異なる）。自身の置かれている状況——豪雪のために陸の孤島と化した幽霊ホテル内で精神に異常をきたしつつある男とともに囚われている——に直面しても、彼女はジャックの異様な態度に屈しない。生き残ることへの意志、自然であろうと超自然であろうと邪悪なものに対する反抗心、それらのおかげでウェンディとダニーは恐ろしく奇怪な出来事から生きて脱出する。

キングは、『シャイニング』をシェイクスピア風の5幕もの作品として構成している。「ある意味、『リア王』の裏返し版。その物語では、王はただの中年男で、娘ではなく息子がいる」[注56]。第1稿では、“章”のかわりに“場”が用いられ、ウェンディとダニーがディック・ハロランといっしょにスノーモービルでホテルから脱出して幕が閉じられる。それではすべてを語り終えた気がしなかったので、キングはエピローグ（「終演後」）を書き加えている。のちにバランスを取り、長いプロローグ（「開演前」）を執筆して、ホテルの波瀾万丈な過去をくわしく語っている。

コスト削減のためにダブルデイ社は、プロローグを丸々削除し、ニビローグのほとんどをカットした。そのプロローグは1982年に、『ウィスパーズ』誌上に発表された。その後、ABC局で『ステイション・キングのシャイニン

左ページ:1975年ごろ、ダブルデイ社によるキングの直材写真。アレックス・ゴットフリート撮影。



上ヴァイキング社のハードカバー版「IT」。
右ページ:ドイツ語版「IT」(ハイネ社刊)で進化てみせるキング。



から、その後の数十年で批評家の評価が変わって、今日ではホラー映画のオール・タイム・ベストの1本と見なされている。キングがこの映画化作品を毛嫌いしていることは周知の事実。かれはこの作品についてことあるごとに批判してきたが、ついに自分で再映像化するために権利を買い戻している。

キングが自作の映像化作品に出演し始めるのは、『クリューショー』（1982）からだ。その作品は、すでに発表したことのある短編2作に書き下ろし3編を加えた全5編からなるオムニバス映画である。シナリオもキング自身が担当した。

映画『タージョー』（1983）のプロデューサーがキングにこうたずねた。ラストでタッド・トレントンが生き残るように話を変更してもかまわないかと。キングは反対しなかった。その理由を、「映画は現実じゃないから」[注206]と説明している。

別の著名な監督デイヴィッド・クローネンバーグが『デッドゾーン』（1983）を撮っており、現在でもキングの素晴らしい映画化作品の1本と見なされている。

『クリスティーン』（1983）の映画化権はまだ原稿段階のときに売れ、実際に単行本として出版が決定した4日前から製作が始まった。映画の公開日と原作本の発売日が近いことを出版社側は不安視した。映画が書籍の売り上げを食ってしまうのではと思ったのだ。

『人狼の四季』を原作とする『死霊の牙』（1985）は、物語つきカレンダーのコンセプトから発展した唯一の映画である、とキングは信じている。

80年代でもっとも成功したキング原作の映画はロブ・ライナー監督『スタンド・バイ・ミー』（1986）である。この名作は、これまでキング自身が監督した唯一の作品『地獄のデビル・トラック』（原作は短編「トラック」）と同じ年に公開された。だが、キング監督作品は大不評を買った。

テレビ業界はまだキング作品を十分には受容していなかった。80年代にテレビ画面に登場したキング作品は

「神々のワード・プロセッサ」とキング初のテレビ用シナリオ「不幸のビデオ」が『新フロム・ザ・ダークサイド』で、ハーラン・エリスン脚本による「おぼあちゃん」がリブート版『新トワイライトゾーン』で取り上げられているだけだ。

80年代の終わりには、ある現象が野火のように急速に広がっていく——原作とは漠然とした関連性しかない続編映画作品の登場である。

網羅的な作品リストは付録Ⅲを参照。



右ページ:ゴードィ(ウィル・ウィートン)、クリス(リヴァー・フェニックス)、テディ(コリー・フェルドマン)、バーン(ジェリー・オコンネル)。ロブ・ライナー監督『スタンド・バイ・ミー』より。